

次の時代に「原爆の図」を届けるための新たな変化

齋賀 英二郎 (wyes architects)

見積額と予算の乖離

いよいよ原爆の図丸木美術館は、改修工事を間近に控えている。3 年の期間をかけて設計を進めてきた身としては、準備万端整っていて、あとは着工を待つばかりと言い切ってしまいたいのだが、残念ながら、そんな状況からはほど遠い。工事のための資金が、まだまだ足りていないからだ。

設計を開始したのが 2022 年 8 月で、2023 年 9 月に基本設計を終えた後、建設会社 3 社に見積の依頼をかけた。3 社の見積額はすべて、予算を大きく超えていた。私たちは美術館とともに、3 社にヒアリングを実施し、技術力、意欲、体制、実績などを評価したうえで、最終的に深谷市を拠点とするシグマ建設に、施工候補者を絞り込んだ。その後は、施工に向けた課題や、コスト高の要因について相談をしながら、設計を進めた。しかしながら、実施設計を完了して、改めて見積を徴収したが、見積額は予算を大きく上回ったままであった。

見積額と予算とが乖離してしまった要因を、私たちは主に以下のように分析している。

- ①仕上げ面積の広さ
- ②過去に繰り返されてきた増改築によって生じた不具合の多さ
- ③長期間施されてこなかったメンテナンス
- ④空調など機械設備の未整備（今回新たに整備する機械設備の多さ）
- ⑤電気設備更新にかかる費用
- ⑥工事種類の多さ

増改築がもたらす不具合

まず、①仕上げ面積については②とも関連する。1967 年に建設された丸木美術館は、当初 250 m²程度の小さな建築だった。その後、増改築が繰り返され現在は約 1300 m²、ほぼ 5 倍の規模となっている。しかし、それぞれの増築部分は 1983 年の本館 2 階増築をのぞいて、すべて渡り廊下によって接続しているので、単純な四角形をした 1300 m²の建築と比べると、壁の面積は数倍にもなる。そのことが、建築コストを押し上げる大きな要因となってしまった。増改築は、ほかにも不具合を生んでいる。例えば、小高文庫の前後の部屋をつなぐ、ごく短い渡り廊下は、増築に合わせて造られたものだが、大雨のときには排水を阻害し、展示室内部への床上浸水の要因となっている。不具合の改善には、躯体を現すか、あるいは作り直すかしなければならない。そもそもの不具合への対処のために、表面的な改装で済まない箇所が多いのだ。

また、丸木位里、丸木俊の死後は、大きな増改築を行っていないが、大規模修繕にも手をかけるだけの余力がなかった（③）。そのため、屋根や外壁などの外装は経年による劣化が著しく、広範囲に手を施す必要がある。そして④⑤はともに設備更新にかかる工事の費用だ。現在の美術館では、わずかに数台の家庭用エアコンが設置されているに過ぎず、性能はまったく足りていない。設備機器の新規購入と設置にも費用がかかる。電気設備は、増改築によって少しずつ増設されており、正確に現況を把握することができない。火災リスクなど将来的な安全を考慮すると大部分の更新が必要だ。

設計方針の変更

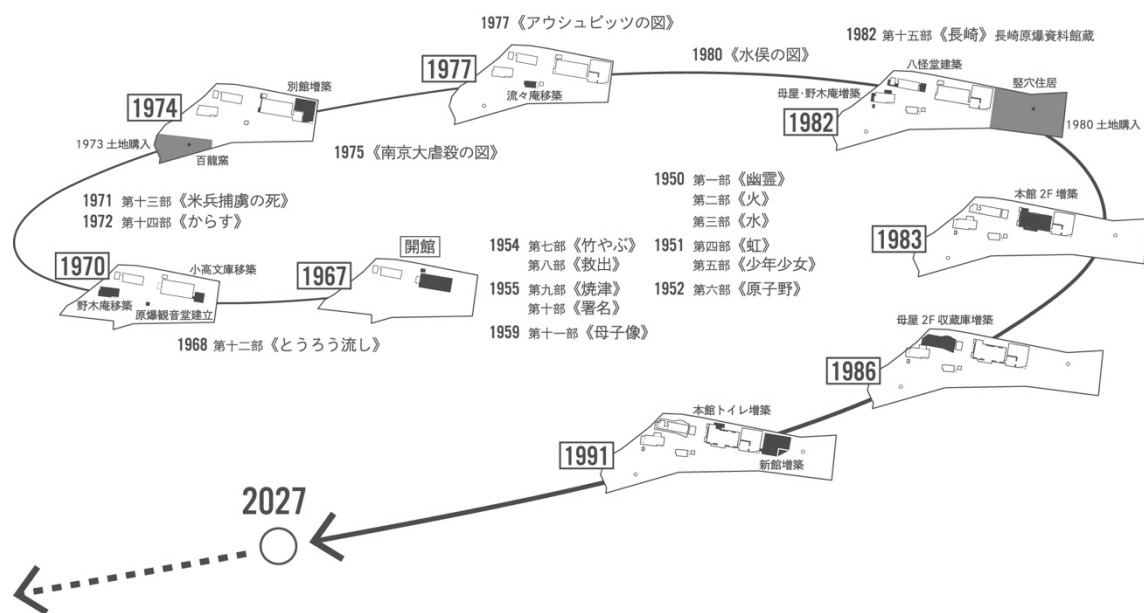
今回の改修では、さまざまな種類の工事を行わなければならないため、複数の専門業者を集めることとなる。工事に携わる職人の種類と数が多ければ、材料費だけでなく施工費（人件費や諸経費）も当然上がる。ここ10年前後、上がり続けてきた建設費も、全体的にコストを押し上げている。ひとつふたつの明らかな要因であれば、それを取り除くことも可能かもしれない。しかし残念ながら、要因は多岐に亘るうえに、それぞれが絡み合っている。ここ数ヵ月は、予算と相談しながら、大幅な減額の検討を続けてきた。

数多くの工事を中止とするなか、設計方針も変更を迫られている。切望されていたエレベーターの設置は延期となる。思い切った工事費減額のために、工事項目や対象面積を減らして、工事費を4割以上削減した。工事を経て実現する建築の姿は、当初考えていたものとは変わらざるを得ない。では、それだけの金額、内容を減らした今回の改修は、何を目指すのか。工事を完了した後、美術館はどんなかたち、どんな姿となるのか。

「原爆の図」を変化させる器

原爆の図丸木美術館は、丸木位里と丸木俊、二人が描いた「原爆の図」を展示するため、1967年に建設した美術館である。1950年に、第1部《幽霊》が描かれて以降、日本、そして世界各地を巡回し、数百万あるいは数千万の人々が目にしてきた「原爆の図」であったが、長年の巡回に区切りをつけて作家とともに居を定めたのが、この地であった。しかし所在は定まったが、「安住していた」とは言えない。58年の間に、軸装から屏風に仕立て直されたり、上下二段に展示されたりL字に折り曲げて展示されたり、作品に付されたテキストには少しずつ訳語が増やされたりしてきたし、そもそも第12部《とうろう流し》以降は、美術館開館後に描かれた作品だ。原爆の図丸木美術館は、「原爆の図」を展示するための美術館として建設されたが、「原爆の図」を変化させる器でもあった。器そのものも、作家と作品とともに成長と変化を繰り返してきた。そして、今も残る地面に埋め込まれた河原の石を用いた蛇や虫を象った装飾、館内で見つかる手書きの注意書き、いつの間にか置かれた樽など、ここに集ったあるいはここを通り過ぎた人々も参加しながら器としての建築も変化し維持されてきた。私たちは、設計と並行してきた歴史的な調査で、その変化の様子、そして変化の最中に生じて残された痕跡を観察してきた。私たちから見て、（こんなにもツギハギだらけで、こんなにもチグハグな）美術館の建築は、まだその器としての役目を終えていない。何故なら、調査を通して、この建築に展示される「原爆の図」の新たな見せ方、現代のアーティストが参加して「原爆の図」と対峙する新たなあり方、そして、訪れた人々

にとっての新たな体験と体感について、大いに可能性を感じ取ってきたからだ。この器には、もうひとつ次の時代に「原爆の図」を送り届けるという重要な役割を担わせたい。



原爆の図丸木美術館変遷図

新しい美術館に必要なこと

美術館が新しい役目を成し遂げるために必要なことを次のようにまとめた（あるいは削ぎ落とした）。

- ① 展示・鑑賞環境の更新
- ② 収蔵庫の新設
- ③ 雨漏り対策
- ④ 1983 年増築部分の補強
- ⑤ 設備更新
- ⑥ 南側法面崩落の復旧

丸木俊が死去した後、「原爆の図」は展示方法を配置も含めて変更してこなかった。しかし、収蔵庫の新設と併せて、今回の改修では平面計画を変更するため、「原爆の図」の展示方法と配置を変えて、展示と鑑賞の環境を更新する。具体的には、作品をフラットに展示できる壁面の改修、照明の変更、天窓からそそぐ光の取り込み方への対処、展示台の更新を行う（①）。収蔵庫は、生前作家が暮らした母屋にあるため、作品を移動するには常に屋外を運ぶ必要がある。「原爆の図」は精細な複製の製作も進んでおり、作品保護の観点からも改修後はオリジナルと複製を入れ替えながら展示することが計画されている。これまで以上に、作品の移動回数は増える。収蔵庫を美術館内部に設置することで（②）、作品の保存環境を改善する。③の雨漏り対策も重要だ。以前には、百年に一度と言われたような大雨が毎年のように全国各地で発生しており、東松山もたびたび大雨に見舞われている。そのたびに美術館の各

所に雨漏りが確認されていて、作品の展示と保存に深刻な影響を及ぼしており、必須の対策である。1983年に増築された本館2階は、今回の設計中に、耐震性能に課題があることが分かった。来館者が長時間滞在し、作品が複数展示される空間であるため、十分な性能を確保する補強を行う(④)。また既述の通り、設備は性能の不足、老朽化、複雑化した配線経路など多くの課題があり、全面的に更新する(⑤)。鑑賞時の暑さ寒さ対策に加えて、温湿度変化を低減させることは、作品の保護にもつながる。最後の⑥は、2022年7月の大雨時におこった都幾川に向かう南側法面崩落範囲の復旧である。崩落発生後、状況を確認して応急処置を施し、埼玉県県の県土整備課による地盤調査も実施された。結果として地盤に顕著なすべりは確認されなかったが、崩落箇所は私有地に当たるため、最終的な復旧作業は美術館が行う。ひとつひとつが、作品を美術館の建築とともに次代に手渡していくために欠かせない工事だ。

2027年春の再開館へ

二人の作家が私財を投じて建設し、周囲の人々との関わりの中で作品とともに変化を遂げて、類例のない時間を過ごしてきた建築は、あそこにもここにも不具合が出ている。船底にこびりついたフジツボをこそぎ落とすように、重荷を解いて、破れた躯体に当て布を施し、人々が新しく「原爆の図」に遭遇する場所を、関係者とともに作り上げていきたい。まだ十分な資金がない点は、悲観ばかりはしていない。過去の増築時にも、着工後に足りない資金を集める呼びかけを行い、工事を完遂してきた。今回も2027年春を予定する再開館に辿り着けるよう、私たちも力を尽くしていきたい。



1974年増築時の寄付募集原稿 © SHIMA ART&DESIGN STUDIO

(2025年10月10日発行『原爆の図丸木美術館ニュース』第163号より)